



誦齋集

標目

松公羽立圖會席教訓

執筆法式

連衆覺悟

邪正弁

親向踈句

秀句緣詞

長頭丸御筆來由

松翁傳

梨材園信德誦評

相々存也崔公羽誦評

同公羽誦評二格

諸家風射當世誦評

古今誦士問答

始



序

和歌の林の良樹の四季の^{アサカ}花実の時と
 ありしは^{ハナ}華を^カ観^カ乃^カ梅^{ウメ}檀^{タン}の^{タケ}新玉^{ニギ}
^{キヤウヨモ}香^カの^{ヤカ}方^カに^カ豔^カ—^カ実^カの^カ花^カ子^カの^カ標^カ木^カ亦^カ似^カ
^{ニカ}曲^カつ^カり^カし^カひ^カあ^カる^カも^カを^カ愛^カひ^カし^カめ^カれ^カし^カし^カし^カ
 この^カ多^カ岐^カり^カ極^カむ^カ花^カと^カ鶴^カと^カ連^カ師^カと
 今^カ代^カ芳^カの^カ色^カも^カ凡^カの^カ俗^カ好^カ実^カ
 や^カあ^カる^カの^カ誹^カ士^カ家^カの^カ幸^カに^カ勝^カる^カ凡^カ味^カ
 と^カあ^カる^カの^カ此^カの^カ百^カ病^カの^カ業^カと^カし^カ加^カ味^カ
 和^カ合^カの^カま^カさ^カる^カの^カ歌^カ茶^カの^カ所^カの^カあ^カい^カの^カ後^カ
 居^カる^カも^カた^カる^カは^カあ^カる^カ也^カの^カ小^カ芥^カと^カ入^カ色^カ我^カ

良哉序



東に絶妙の如き聲に動く細の聲掃さるるを其の
 此と流しに便やせらるる如し

梨柳園

信徳叙

誦林良技集自叙

ハシラタテ ワタニシ
 ヌセガキト フシムシテ
 スムトセシホドニ ナラタニ
 ヲウルトコロ アリテ コ
 サイヲウクルモ ナソワカ

昔元祿十辰宿丁丑重九念五
御溝水頭白梅園主人鷺水
採葉於三省軒下

誄材良技集標目

立圃會席教訓

執筆法式

連衆覺悟

邪正辨

親句踈句

秀句縁之詞

長頭丸御筆來由 曰貞徳評

松翁立圃傳 日尺躰

梨柳園信德評

相柳齋芭蕉翁當流評

諸家風躰

當世誹談

芭蕉翁脇躰

同第三体

古今誹士問答

誹林良棧

立圃會席教訓

かよと誹諧の云席に出るさおの目え
公和のりをもあし。つぎ身と後めあ
ろひ。目乃と云席此祈人の年しとほら。そ
席にるく。後忘せさ乳やうにたしむ。
処道の之支とあみ。案かあふ。抄おホ
右のなを。とを見ゆる。一。
そ。和。少。む。く。右。古。知。わ。と。以。味。て。ん。と
る。く。院。し。悔。小。三。膝。よ。入。と。ぬ。を。一。
と。て。に。列。存。し。て。い。怪。力。乱。神。の。あ。や。一。何。
答。あ。ま。い。さ。も。く。心。お。し。然。も。と。れ。て。ん。抄。

まゝにいつてしまはる。又一階の足跡をたぬと
 て新帳し。玉所の人へうまひこころ。居つて
 人あつた。うまひにほつた。うまひのまふく。まの
 みやうた。物書又いぢれやと誇つてゐる。まの
 乃んまゝに居る。まのまのまのまのまのまの
 人あつた。うまひにほつた。うまひのまふく。まの
 編みこまゝに居る。まのまのまのまのまのまの
 づつた。又まのまのまのまのまのまのまの
 とりまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 なる。まのまのまのまのまのまのまのまのまの
 句まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 さのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

三つてゐる人の再遊をやらせて居る。まのまのまの
 に及ぶ。又いさか。まのまのまのまのまのまのまの
 ぬ。まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 句まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 人の句まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 ひもまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 いまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 執筆の年。まのまのまのまのまのまのまのまのまの
 おこつた。まのまのまのまのまのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 と句まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 ちまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

して我々のついでに優へて神又人の
 けけうをぬきつゝいかにくへて才學を
 日進するやうな人の世にあらざらん
 云々席にのほりてあつた人におもひ
 せむる神又他の先あるはけりけり
 又くすしといふも柔和に自他とい
 てもあみふりてりやあるはけり
 て貴人好士の白りとも冠角のひく
 句とくはるあり又さうもあつた
 くとも人のとくさうもあつた
 色しあつたことさうもあつた
 ありては乃と云々事といふも執筆

おぼしきへへ又さうもあつた
 まのさうもあつたの感あつた
 紙かといふもあつた
 一又執筆のゆゑにゆるり
 をかさうもあつた考へり
 あいもあつたのゆゑに
 此又亦人好士の白りとも
 とう執つてあつた考へり
 出にへへともあつた
 のらまつたあつた
 座乃好石扇風障子の絵
 といふもあつた人の考へり

あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施

あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施

あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施

あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施
あつるまうらうくそめられえあるに人の施

勢をけかし一書人者卷のうへひあはれ
 まを盛かとも考乃と記よりかをとらと下
 但は金にありとさし記する月やと一
 カウキン 又人のうさおとさる考に後身と
 耳やら事やりいふをいひ入るやうに
 志あふほつひと一又そのまのうらたふ
 をいせぬとてつひにあらとけいめり
 の人ふさうはるそのまのうらと一あは
 志原あふぬ月一といひあつたといふ
 ぶれた一巻の真とて入るる一
 とを席におかくさうとていふと一
 交かといふとていふものるはかととて

まつ巻一巻のほつ巻のなりえに立る
 に集入のうら月一や
 めくまゝ食一西くまなかり 研
 うらたそのやんや一物とて勢の
 とるやといふあつと一とて菓子かといひ
 やりらと一とてを記すなり
 をつこのうらとて余いなる地
 の人ふひつて他のうらとて西んふいめり
 家らとて人へてあつとてあつとてあつと
 けいめりなり

執筆式

苗をのまにりにかよひに意目の一
 カウキン

他をいふに人の教とことくわつては...
この事ハハハニメテメクルも...
の事ハハハニメテメクルも...
つとく義也...
二月に二条大周...
合神乃新式と定...
執業...

文臺 寸法のより長一尺九寸七歩中一尺一寸六歩...
早まれば法...
はつたの...
先取の...
良成上

さしひ或いあるそのさるるやしく懐独と形
く魚しく見事事さくし源平一受るる多
嬌あなし但指ありおとひ少くまともふ言付る由来
の好んたミツキニしく其たの宗道ソウダウにうく好宗キウソウ
然納あり懐身ありうり一り名まで書く
し好くさく書人の四角に指家さくもわくやうそこれとすてたしあなし平人の句の宗道ソウダウの然納
懐身人なまの句はうけとりり名のりさ
るるさくかたに又さくあひ去懐いしくい
執事キニシよりし味さくへ書人お人の句又お人の人しあいのさなしく長
かきみるはむいさくさく中の人いふさくあひさ
さく執事と宗道とあしはさく一たより採
るる凡務エロウ之又みさくいよやくりく後執事

中野人の懐身はさくあつと茶さのむへはは菜
子くふるさくさく大はさくさく源いさくはさく
句れりさ事はさくはさく急りさくさくさく
言ふその好んたさくはさく持さく末たさく
さくへし他者人の句はさくさくはさくめさく
文書さくさくはさくいさくはさくさく

連衆覚悟

おとを月ツキ後乃席セキにあのさくえん程の人誹諧の
なまナマはさく覚悟カクゴさくへしはさくさくさくはさく
あさくさくさくさくはさくさく月ツキにむさくはさく
さくさくさくはさくさくはさくさくはさくはさく
さくはさくはさくはさくはさくはさくはさくはさく

今や世にこそ是れを言ふとて、
 其の起り舒舒之遣ありと云ふ情そのにこれ
 くに内に感し詞なく記し舒く若く曾中
 の感慨と遣り句詞乃極り老れおとくや
 字書此後何を待たずいふ謂古今集の
 序もやまを歌人の心を待ててよるの
 乃この事とておもしろけれ歌の名を待てよる
 歌の世にゆくは法を言ふはひらりおもしろ
 一法を言ふと歌多しと云ふや、まろく乃極り
 といへば法を言ふは法を言ふ世の本懐と云ふ
 一彼彼の歌もえ侍ておされるか、の極の言は
 に妙法をいけては妙といふは法のと及ぶ言ふ

今世にこそ是れを言ふとて、
 其の起り舒舒之遣ありと云ふ情そのにこれ
 くに内に感し詞なく記し舒く若く曾中
 の感慨と遣り句詞乃極り老れおとくや
 字書此後何を待たずいふ謂古今集の
 序もやまを歌人の心を待ててよるの
 乃この事とておもしろけれ歌の名を待てよる
 歌の世にゆくは法を言ふはひらりおもしろ
 一法を言ふと歌多しと云ふや、まろく乃極り
 といへば法を言ふは法を言ふ世の本懐と云ふ
 一彼彼の歌もえ侍ておされるか、の極の言は
 に妙法をいけては妙といふは法のと及ぶ言ふ

衰^{シニ}種^ラ家^ニ傳^レの^ニと^リて^テか^クは^シく^シ作^スと^モあ^ラず
 一^ク深^クて^モ浅^クて^モ凡^クあ^ラひ^ハ賦^ニあ^ラず^シ述^ス自^ニ好^ム
 一^ク詩^ヲま^シ著^ス得^ルや^ハい^ハ換^ス骨^ヲと^シた^リ和^シ物^ヲい^ハお^ハす
 制^ノ詞^ヲや^ハい^ハま^シの^ニ此^ノ格^ヲと^シて^モや^ハい^ハ山^ノ海^ノま^シの
 あり^しゆ^ク物^ヲい^ハ作^スと^モあ^ラず^シ空^ニ却^ル乃^チ字^ヲ
 一^クあ^ラひ^ハ功^ノ業^ヲも^シた^リを^シ老^ニ相^ヲあ^ラひ^ハ沖^ノ波^ヲ又^シ
 一^ク後^ノ悔^ヲ痛^クと^シて^モあ^ラず^シか^クあ^ラひ^ハに^シて^モ終^ルて^モ
 一^ク詩^ヲい^ハく^シ終^ルと^モ客^ノ情^ヲと^モ虚^ニや^ハい^ハく^シあ^ラず^シ
 一^クあ^ラず^シ

一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの

一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの

一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの
 一^クあ^ラず^シの^ニあ^ラず^シあ^ラず^シあ^ラず^シの

然るにわが心をわすれぬかたしやみゆるハ程師孟
静室と作つて甚との風氣とあはれ毎月の
とらるる水一或月されし詩紙紙一い

毎日更忙 頰一到
夜深長是 點燈來

や作りの事元規一みとせよハ本る元規一い
いづくもこころ終登淵詩なり
のまじりしつゝも信といふも非し人の善悪と
目といふあおめと西儀やあはれと後深又ハ淵と
とらるる水一或月されし詩紙紙一い
とらるる水一或月されし詩紙紙一い
とらるる水一或月されし詩紙紙一い

若う代いしとえのねふくくせ
とほろろ流乃く流をとくせ

や弘徴殿のやいかんあ合にまみや一さひも同
とらるるにやまきあにぬか日向守

や個伏のつとさひも進つれも白注のあひま
一あにえつゝも身害ありつゝもといひ

森野野る像とくくくくくくくくくくくくくくくくく
やいふ暗水流花徑春星帶草堂と子養
工業とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
月のとにありつらさぬ磨の
糸糸もきくくくくくくくくくくくくくくくくく

く終つてやそのとあつてかゝるべきまに

人いこれおりのいふく杯の目か終る

いふらあゝ

名月や比叡を好みしるは比國水

々々の月を好むもわく付いふ事か終る水

これと極えんとしき山海草木あつてゆきまのこ

にわくく虚句と標りゆきあり山雲元隣いふは

句のまなにむきまを彼傳話の六く元来

三十六といひしに前に老相病やいひ詩か答

懐かりとく嬉ふま終りけ格ありと急哉の半

乃山やや笑ひまひつるま

いと終ゆく人の心乃あゝ

うにまにとゆる秋のまけし

やいあをとまればぬとやとまてく付るまこんはく

ありやうに庭洲あま強りままは終る虚ありまれ

あゝぬといひしは秋といひしはあまこゝろいみり

けくくくかり付るま飛を井の般の二位特室の

書とく人ま人のかり付るまを彼記文正

公の巖子陵か祠堂の記と作りま終る附雲山

蒼々江水決々先生徳山高水長やいふあり

いりてま子太伯その在にありていくせん

ま徳といふ周のまよとく徳の字に代あま

と列せし正公竹松やとく改めたり

るくまをこゝれつるいふる内秀才のま人乃

良政上

七

虚実いりて一これか人一隅とあるまじく三陽は
知の事先一下下下なる。和子の人のあやまらば
向さる先輩の智と習く人あはれはあはれと
うらひひて格とつゝ急すむや一をかくれとあはれ
あまにありとぬれとをかくれはあはれ
罪のあはれはあはれ一功志名人のうらも能く
紙殊アささの性業子とのさひあるとあはれ
る一

親句疎句

親句疎句のしり初書に寂蓮法師傳あり
和序歌曲係のみま行園抄ありを親心とせし
と書とやれし人あり
立圃紙殊やりのこの小婦少婦との親とら
る一

の書有親やと傳へしあはれとあはれとあはれとせ
り終しと和子の訂補とを終しありと
親句疎句のしり初書に寂蓮法師傳あり
声同お通やあはれと親句とあはれ

言の天水抄にひくまはれ
やとあはれとあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれと

此のほ人乃板切りとあはれとあはれとあはれと
そのあはれとあはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれと

良枝上

これに松年集人正の白とやといふに
つねに縁起くわゆる志をくか
あつてか目につくおくも松の凡
又香色声といふに

ほのくさよとのとくにまおくと
志をくかして縁起くわゆる

志のくさよとのとくにまおくと

けいといふあやの茶やたみり可れ

あつてか目につくおくも松の凡

同お通やといふ

といふに

色類といふ

きんぎょくくわゆる松の香といふ

秋といひく。琴のひきん。松の凡。宗。砌

誹諧よる

色類といふ

いさよひ。海老。栗。ほとの。香の。園。と。瓜

右の部に親るといふものあり引白道く縁起
殊白ふ二美あり殊白正殊白く引白引白

奥くえよ何乃香もれ梅は花

西殊白 杖よりく香かた焼入ん梅しり如泉
こ徳くの深なるへー又香色声五音お通と

つらき鳥さへくはつと一葉いつとをけ格と
とくおとす

あいうえお
かきくけこ

秋といふことの
秋はにやと秋の
文字の後の格を
中のよりなりと
の格をとおとす

かきくけこ

秋はにやと秋の
文字の後の格を
中のよりなりと
の格をとおとす

あいうえお
かきくけこ
さしすせそ
たちつてと
なぬねの
はひふへほ
まみむめも
やわゆよ
らりるれろ
わひふへれ

秋といふことの
秋はにやと秋の
文字の後の格を
中のよりなりと
の格をとおとす

はつと一葉いつとをけ格と
つらき鳥さへくはつと一葉いつとをけ格と
とくおとす
のらみははるくらの外キニキニニ井
引と幾くイと生一クスツヌフムユ
ルのウにうらるはきくひとくくま声
とあつとを

あいうえお
かきくけこ
さしすせそ
たちつてと
なぬねの
はひふへほ
まみむめも
やわゆよ
らりるれろ
わひふへれ

秀句縁詞

秀句かりに二葉あり一とす

るる智をめりたりと志うると西筆の物知小
明人の眼とほりてあるとに真ふ乃傍本
食と人並教と修訓一まひつるものに云々
抄とく二巻の文すさるゝいて世此人の如
りそよるありたるは乃見まひとねる
る見しうひ乃に髪乃筆れまひあくと
らく、後人種家あつこのらにみあくとん
るゆあうやけさる終と家ッ部式にふ
るへむとくんとさる筆はくさるて
西筆七まきとあうり一まつるささるは法花
の女子は母後乃永あまりひつる百
移人乃後乃派とさうと終しと門乃

柳階かりととあうくつて人たり

松翁五圃

ひうひみる解あらみのがらんか
ハまひとく名ひく終とと物花
10 子にあるか人の約乃たさうり
かうとあをほるもひるは法花
るるに志うぬ書も加あまれば
終る也行もたりをタうと
けるあらのうみハ丹列保陣の書あくと野は氏
宗乃奥の教ととひるるそのぬあくと累代
とろろ小終くと終と甲書と書うと

良成二

松翁

人あり民のよりらめやまにあらにせしもの
 に徳儀の及しとまをましく踏えて一家の
 道統とせんといふい一人のめる日統と
 くらうといふ名とわうしとくおまのからま家と
 をとめ難といふまのし生海といふま子
 後いふ海といふとまとい倫といふま
 の道徳といふのしあとい
 後水庵とてかんのあふとわうしけあし
 骨肉乃ちをいふといふいおうといふあとい
 駕丸亜相の望とてとくくといふまの
 子にかんといふに芳句といふまのつうとい
 京つうへのいといふといふ人のあとい

新ハうと結つくち地の若やとてとくといふ
 をれいかりとめ及といふとてとふあといふ
 を志といふといふあれといふあといふ
 如史といふといふあといふあといふ
 今いおうといふといふ源氏といふあといふ
 にあといふといふといふといふといふ
 のの比は後れといふといふといふ
 西手にといふあといふあといふあといふ
 といふといふあといふあといふあといふ
 のやといふといふあといふあといふあといふ
 15月花の三つと今知らせ
 世のいといふといふといふといふといふ

仕友の務分のいとぬある目とみ乃をよや
 石よりと芝とつりく此と碑の銘と
 一くいよふほくせりこは流ゆく行と
 夕一て後めらまの月ハ送映くやうある一
 かん誂茅のこややくをよや一まひれを
 乃柔何乃つこく事毛れくやうて
 才まありしあひを家かの鈴音輝乃足
 川く棺の蓋と志りく長く流世運と
 の夏派お破しまい人あまやうとやあ
 其一生の風骨まもつりくやびくあり
 現世あ民のこくはくおかくありやうと

何長信徳

松の葉おけらつりかん老のこ
 葉牡丹いつと乃よりそんか
 幾中とせ月見一草は花の
 三月や清水寺かん流ま
 20 長とく松のこを
 人高を物凡志のこ
 多格り砂京あつ一教と
 孫うよむ百人一そ信人め
 ともこや女の眼鏡と
 癖あり賊癖あり杜死に
 誂格の癖あり百舌の
 千右の凡神とすよとの格と凡連に

貞成上

共

秋に遊一旅つとくさるふ衣史の甲冑と
帯一帯ととりく万人乃敵一たりしん
秋のいよほひありあま又云分内周廻湯
多二月中旬己進瓜

芭蕉翁

人を見ぬ花やあはれのうらめし
大はげの葉乃りりや何れ
とみつぬ藤のう花や並そ
人は家とついでく家いそ
かうさけもくやの瘦まき
30 うたれとひりくせよかん
竹のこたあはれは乃花のよ

蛸臺やとくあはれと交の月
花を死ぬやうにえは蝶の色
交るやつとものたうゆあ乃あ
月のたああひくさう又月あ
ちかっ道二とひせにさうさ
ひささ菊骨りやうとせ

36 ここのうらめし
とくさるさうさ又さうさ
花の赤衣に帯とむさう
やあんせうはほくさう
め程屋ののさうに知り
此の月凡とつと俗はく

良枝二

七

おちと布袋の禪にありはた歌の吟詠と家
祇乃履にありやとありし一きもいひたふ一交
きあり新川乃ちれえにきりてきりて
のちにあしきとむの心きりてきりて
月東かん杜子翁かり今の世乃ちありあり
紙とろわあにありて及とぬ人又文
いひまひんぬ紙にありて履眼とわて
らまありとうよふる風もる活あも礼者元
彼の世とありしり花辰月クあも各々
建の身のわとあつらるる牛の牛の大
跡と往及もれ一や句くあも一歩をこと
まに詞一もら等にきりての長ありとま

んいありのまじりて終るるあやうはこ
とむとむいひといはるにそのあやうの神
もその人あはれにゆゑあやうとあひは
らんりあはれにゆゑあやうもあはれに
その心ありて其人と一なるあやうの作
あはれにその心とあはれに一なるあやうの
あはれにその心とあはれに人をもあはれに
字もあはれにその心とあはれに一

晉其角

くらねめあひいよあつる扇とらと
まらうしな枝のよめあひのた
あしうしなあひいよあつる扇とらと

良枝上

40 うけひのやまのふもろの芥の花
きれとて縁くまんとて里から
縁をろやとてわんたのあなひ
とつーもいぬとからるを船の中
あまのこまうにけりけと新酒が
あうてやせみも雀もゆるう程
下をとりが伴定よりあけと

吉原

50 ひとと縁を能おとさし人初子目
くまうてはまぬあなひ縁く
うれとていぢまぬ猫のえあふ
あまのこまう下をふかすまき

あけのふもろのやまの芥の花
百姓を妻にやうつく茶搦あ
あまのこまうとてわんたのあなひ
うれとていぢまぬ猫のえあふ

吉原

あまのこまうとてわんたのあなひ
うれとていぢまぬ猫のえあふ
あまのこまうとてわんたのあなひ
うれとていぢまぬ猫のえあふ

月玉

60 月玉のたのしみ
あまのこまうとてわんたのあなひ
うれとていぢまぬ猫のえあふ

いそがりに男はかたぬらー
かりの女はよわくくんのり
糸この風風のおいふとさうく

ふま

深うやうほそくはあれ白田
カ乃キつよあさくささー
志しきわ是中の一もあはぬ連
日の雲はこくあつさ牛の舌
徳をたれたありあるーられど
弱むくさ坂よりいれああり

尚白

70 一えさおれぬもはく山橋

形梅のちりーかまは三月
よさ川橋あさ柳ー水
かとまはあさあさりー後と
さひーあまあ人あさああり
あかうらに粉とせりあぬあ

白に死活あり劉弱あささー
有りふさきありつーあさあり
勝まらくわささー一集一編
難ーあさい同志傳あまの
たささあさあ入ささあその
かささあさうくさのみま
さやあれともあさ通ー

乃情のまひらふふれあつらへるは
いふかたのひもあつらへるは
乃情のまひらふふれあつらへるは
いふかたのひもあつらへるは
乃情のまひらふふれあつらへるは
いふかたのひもあつらへるは
乃情のまひらふふれあつらへるは
いふかたのひもあつらへるは

脇の仕度

おれはこれに致すとて

おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて
おれはこれに致すとて

志しひやうとめつゝふきしめ祈りて
 しるふあひひの大おらひのやあふの
 こころをわくのふふ祈りて
 を知りてかきふらふきとやんを
 んのそをわくわくといふと
 あきとめとていふや

守三の仕度

おろやえう心定のうま
 多かそこの八日この祈りて
 綿タテやふきむきの星
 こころい階子のくまを
 くまう新目に城のゆる

夜ういかりやいなるきり
 目のゆるまのあうに
 下をそと一真流ふらあけて
 ちかき又なるきり

今け身之祈いぬ乃骨
 右人の弱を戒とけし
 まる地をあらはるの根と
 け毛根強徳のあさ
 るる
 かさうに人ありいそ
 するれ謙師おやく人よ

義あり十折あり細小又折あり八折あり才こと
三岐おやいつる細ありありあり下の句はてぬ
やうく引くおひことありありのありあり南風のこ
かやう小徳アキ〜〜意味あるとあるは縁うくを
予り蕉セウつモシのタゆらにうり〜〜とんとつおや
くか〜〜に又人ありい〜〜そのもはつと云
や〜〜れ句と〜〜の〜〜と〜〜り或
を一向切字コウキレチのび〜〜とい又眼カンあり
眞ケイやれと〜〜野ヤ卑ヒ乃ニ河カつ〜縁
爰ホツ句と〜法コウ式シキと〜とぬおとあり字とあり
と才こと〜
後百のらくい、物ありありの〜〜
ら〜〜の月〜〜ひた〜
〜〜の〜〜と〜〜の〜〜

わ〜〜い〜〜と〜〜に世〜〜りて〜〜い信
ら〜〜い〜〜たのやれよ〜〜と
を〜〜い〜〜人あり予〜〜と
か〜〜此カン看とやれ人乃ありや〜〜と
世亦古風セウフウや〜〜中ナカに折テ十折テと〜〜と
も〜〜りシ摺りシは〜〜のテ控シと〜〜と
〜〜あり〜〜人の徳カをれは〜〜の句ふ
〜〜とセツ子め〜〜と〜〜と
身徳ミトク的テキ徳テ〜〜のモシつ下カ〜〜と
Pクが〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜ありと〜〜と〜〜と
折格テと〜〜と〜〜と〜〜と

中の言と云ふはさふしひのたよありきしてを
るれ中乃一終とをほつるやうに一考く多
くいもの癖とつてそのおとあまんせはらの
おとらとゆんとして格外のとらとほつり
つらに俳諧乃やうことあるゆへは後で格孟浪
あり式あり此ゆへにの白小粒のとあこま
あといひて杖つて坂のたと引乃まといあり
いあつは粒の白ある事若眼の人よあひま
危しあひまをと暗せられさふめくされん板
おふおれ白ありとらんも人されとまらさるり
あひつあつて諺の直人とあれ諺と直人と
るらうやられ新格骨度のりあつはまらる

やうな一あひの白あつてつてつての二とあに
あひはあ乃たと執せん人えい入つてつて
その余の可吾にまよいづれをゆとらあひ
たやういほとさふとらをえあれし

授門葉之小子等書

貞徳立圃の家つたの父母と宗因とあはる
をけたのゆえんやうに西東の他ゆは彼人
あひ見孫やうり兄弟あり一平を貴く一
あひいやと賤さう貴さと詰りみとあひ
あひあひあや弟の道はあやまらるる一とあはと
あひあひあひの非と殊と真なるくくた

良成二

いちぢやうに多しより物さの罪なりあるとれつた
 きと取しむん乃たをくむく之業討つ徒
 かりと退くそとふま己と元元の愚より
 出つちこれと討一人を非と致すの
 ち地交際のはとふまよく日夜等困の
 吾とすしは色のせん悟あふまははは
 おもつて一龍風今古あり人身を是あり是の
 能手の能におうそに十指の手にはは抱
 抱ふ乃用あり十指の足よこしりさ
 復と支元の徳のそあは抱抱元抱
 用と用とを以て志れそをさののんか
 さういば女士執波乃えぬくくんは欲

ともおよむの功め事又自にそと
 といんや今古龍乃別をそ又がのそ
 一とともし今と是とに多しは縁徳序
 の新しりある用中多まと少む採款詠史
 格三易控骨の多知やま古あす
 用とたふへり南月の方よりと減却一服
 にはま多能証信おんはとこふはし
 あうさぬお冬しと古月丁寧の法と採用
 せり親し似たり結小いまやれはあひと右の色
 歌にやしひく申右の道々そとそ制
 格外小出くそんそんの欲するあま
 元一角の秘密とけ又い今採りそそ

